
禁煙席にて

雨宮雨彦

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

禁煙席にて

【コード】

N5337C

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

梅五郎は毎朝、同じバスの中である女と乗り合わせる。だが彼女は、梅五郎のタバコくささがお気に召さぬようだ。梅五郎は一計を案じる。

井上梅五郎といえ、猫坂あたりで知らぬものはなかつただろうよ。大工の親方でな、背が高くしかも太っていたから、目方は普通の倍、もしかしたら二倍半はあろうと人々は噂しあつたもんさ。

この梅五郎はタバコが好きでな、いつもスパヤつておつた。だから停留所でバスを待つ間もそうだった。匂いの強い独特の銘柄が好きでな、白いヒゲが黄色がかっておつたよ。

知つての通り、あの路線のバスは一時間に一本しか来ない。そうであれば、乗客はほとんど毎日同じ連中が顔をあわせることになる。半月もすれば互いに顔見知りになり、会釈ぐらひは交わすようになる。その中に佐藤女史というのがいたと思つてくれ。女学校の教師でな、たいそう厳しい女だったという話だ。

車内は禁煙だから、もちろん梅五郎もタバコを捨ててから乗り込んだが、こういう男のことだから、何もせずに立っているだけで匂うのさ。それである日、車内で佐藤女史が一言ご忠告申し上げたというわけさ。

「あなた、もう少しタバコはお控えになつたほうがよろしいんじゃないですか？」

この無遠慮には車内にいた全員があきれてしまったが、梅五郎はそれにどう答えたと思う？

「あんなのしなびた顔のしわの奥にもぐりこんだ三年半前のおしろいの匂いよりは、何ほかましじゃないですかい？」

車内が爆笑の渦に包まれたのは言うまでもない。佐藤女史は顔を真っ赤にし、すでに座っていた若い娘を押しつけるようにして、狭い隙間にむりやり身体を押し込んで座席に腰かけた。梅五郎は、まわりの乗客たちと目配せを交し合っていた。

だが、騒ぎはこれだけではすまなかった。翌朝から梅五郎は、バスがやってきて停車するぎりぎりの瞬間までタバコを吸い続け、煙を肺の中いっぱい貯めて、一息も吐き出さずに車内に乗り込んでくるようになったのだ。そして佐藤女史の姿を見つけてニンマリ笑い、すたすたと歩いていく。彼女の真横に立ち、当たり前のような顔をして話しかけるのだ。

「やあ、佐藤先生。今日はまた一段とお美しいですなあ」

その息が煙たいこと煙たいこと。佐藤女史はうつつとなり、ハンカチを鼻に当てて下を向く。一言も返事はしない。梅五郎は顔を上げ、まわりの男たちとニヤリと笑い合う。佐藤女史だけでなく、まわりの乗客たちも匂いを感じたが、窓を開けて換気することはできなかった。季節は真冬で、このバスは暖房のききが悪いのだ。

同じことが何日か続くと、「この車内ではタバコは禁止されているはずではないか」と佐藤女史は車掌に苦情を言った。車掌は苦笑いしながら注意をしたが、梅五郎はおどけた顔で「おいらは車内じや一本も吸っちゃいませんぜ」と答えるばかりだった。

翌日から、梅五郎と佐藤女史の我慢比べが始まった。佐藤女史は車内ではできるだけすみ場所を取り、梅五郎が近づくのが難しくなるようにした。だが梅五郎も、身体は大きいがひどく身軽なので、ちよっとした隙間を見つけては、ひよいひよいと入ってきてしまう

のだ。これには佐藤女史もどうすることもできない様子だった。

そうこうするうちに、梅五郎はさらに新しい作戦を思いついた。タバコを二本まとめて火をつけて口にくわえ、二倍の煙を体内に蓄えてからバスに乗るようになったのだ。これには佐藤女史もほとほと参ってしまったようだった。このころから、タバコを吸っていないときでも、三メートル離れて通り過ぎるだけで、梅五郎の身体からはタバコの匂いが感じ取れるようになった。佐藤女史はますます車内で小さく縮こまるようになった。

梅五郎は調子に乗り、一度にくわえるタバコの数を増やしていった。三本になり四本になり、五本になった。火のついた五本のタバコをくわえてスパスパやっているというのはなかなかの見ものではあったが、それが梅五郎の最高記録となった。

その朝も梅五郎は、五本のタバコに火をつけた。遠くにバスの姿が見えてきた。肺をふいごのように忙しく動かし、梅五郎は煙を吸い込み始めた。まわりにいた者の耳には、古びたバンドがこすれるときのような音がその身体から聞こえてくるような気がしたそうだ。

バスが停車した。息を吐かないために口を閉じ、顔を真っ赤にして、梅五郎は踏み段を上がり始めた。一段、もう一段。なんだか今日はひどく苦しそうだ。それでも三段目を登りきり、バスの床に立つことができた。

だが突然、梅五郎はうつと叫び声をあげ、白目をむいてしまった。そのまま意識を失い、前のめりに倒れた。突き出た腹部が床でバウンドしたが、自分で起き上がる気配はなかった。梅五郎は気を失っていたのだ。大きな身体ゆえ、何人も力をあわせて車外に運び出し、すぐに病院に運ばれたが、そのまま二度と目を覚ますことはな

禁煙席にて

かった。

翌日からはバスの乗客が一人減ってしまったが、佐藤女史は今でも元気に通勤しているそうだ。なんでも何かの難しい資格試験に合格したとかで、ちかぢかもっと給料のよい別の学校へ転勤することが決まっているそうである。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5337c/>

禁煙席にて

2008年11月7日08時16分発行